

# 『全唐詩逸』をめぐる長崎の日清文化交流

—文化元年の市河三亥を中心に—

杉 仁

## I. はじめに、『全唐詩逸』渡清と日清文人交流—

文化元<sup>一八</sup>〇四年、長崎で海商に託されて渡清し、清国文人界で評判になった書がある。市川寛斎編『全唐詩逸』(天明八年淡海堂刊、文化元年刊)である。上州箕輪「下田衡」らに村文人が版費を提供し、校者(版費校者)に名が刻まれ渡清した。

『全唐詩逸』は、中国で失われ日本だけにのこされた唐の逸詩を、国内諸書から網羅して全三冊にまとめたもの。渡清後これを「海商船中に得」たのが、博学好古の文人で日本研究者でもある「翁廣平」。海商から私的に贈られたのである。さらにこれを私的に親しい藏書家文人「鮑涑欽先生に贈」った。清国文人界では、康熙帝勅撰『全唐詩』(一七〇三勅。全九百卷四万八千九百余首)の欠をおぎなうものとして高く評価された。やがて「涑欽鮑廷博『知不足齋叢書』第二三六冊(全二四〇冊道光三年。一八二二文政六年)」に復刻され、付された「翁廣平跋」がその意義をたたえた。

渡清から四半世紀、これが長崎に船載されると、『全唐詩逸』の高い評価も里帰りし、国内でも評判になった。『全唐詩逸』渡清は、ひろくアジア漢字文化圏に普遍しうる一大文

化事件であった。

これらの動きは、内外ともに私的な文人交際と文物贈答の交流網によっている。そこにどのような価値観が普遍していたか。在村文化もふくめ近世文化は、古代以来ひろく生々流転するアジア文化循環網のなかにどのように位置づけられるか。その一端を垣間見ることができ。

『全唐詩逸』天明年間成稿から文化元年出版までの経過、および在村文化とのかかわりは、前稿までであきらかにした<sup>1)</sup>。ここでは、長崎での『全唐詩逸』渡清とそれをめぐる日清の文人交流の実態をみたい。

『全唐詩逸』渡清をめぐる日清の文人交流は、文化年間に二回あった。一回目は文化元年『全唐詩逸』を渡清させた市河三亥の動き。二回目は十年後の文化十年、『全唐詩逸』を編纂した父市河寛斎の交流である。期せずして長崎奉行牧野成傑の「賓客」として長崎に約一年滞在した寛斎は、渡清のときの船主「張秋琴」もふくめ、長崎文人・唐通詞文人・海商文人らと親しく交歓した。応酬した詩文の記録が<sup>2)</sup>このころ。

『全唐詩逸』の授受や出会いの場で、どのような海商文人との交歓があったか。その背景に長崎文人や唐通詞文人のどのような日常交流があったか。『全唐詩逸』渡清という文化事件にみえる、在村く中央く長崎く海商の動きをあきらかにしながら、近世の社会と文化のあり方を見直す一助としたい。

Ⅱ. 市河三亥の京入りと『全唐詩逸』の出版

へ1く三亥の京入り

前稿でみたように、『全唐詩逸』出版・渡清をすすめる三亥は、享和三〇<sup>一八</sup>年八月十九日に江戸を出立した。東海道各地の文人宅で歓待されて長逗留をかさね、十一月五日の四日市入りまで二ヶ月半、ゆっくりの旅であった。四日市では、菊池五山（池桐孫）と四日市詩社で「同社に謀り資を醸して梓に入」ることが定まった。四〇日余の滞在で版下を清書し終えると、京での板行をめざす足も、板行された『全唐詩逸』をもって長崎をめざす足もはやかった。『西遊日記』で足どりを追ってみよう<sup>①</sup>。

四日市をはなれたのは十二月下旬ちかく。「十二月十八日。四日市ヲ発シ関ニ宿ス。十九日。石部ニ宿ス。廿日。京ニ到リ……」など、ひたすら出版を急ぐかのように長逗留なしの直行で三日目に入京した。

翌文化元年四月十六日、長崎へ出立するまでの四ヶ月余、京での動きの一つは『全唐詩逸』板行の手配と刷り上がり待

ち、二つは京都文人との交歓、三つは法帖・書籍の購入、四つは京都見物であった。

在京四ヶ月でまじわった人を列挙すると、小栗万年、伊澤岸雅楽助、皆川先生、佐野少進、越後新潟佐野兄弟、さらに奥田玄龍、台麓、伊澤深藏、拷亭先生、大雅堂主月峯、伊澤子琢、池田筑前守様御用人青砥喜八、越中富山杉林主齡、佐藤半兵衛、梶川文助、若槻源三郎、清田謙藏、越後三日市關儀左衛門、小栗萬年、清田龍川、橘梅仙などがつづく。詳細ははぶくが<sup>②</sup>「皆川先生」は皆川淇園のこと。三亥は早くも入京四日目には（12/24）「先生弘文館十七帖、宋揚聖教序摹刻ヲ示サル」など、もっぱら貴重な法帖をみせてもらっているが、淇園からもらった揮毫「送序」に『全唐詩逸』出版・渡清への言及がみえる<sup>③</sup>。

へ2く淇園の語る『全唐詩逸』出版過程

淇園はいう。「……享和癸亥季冬その子孔陽（<sup>三亥の字</sup>）京に來りて余に謁せんことを請ふ。……孔陽因りて云ふ」として、『全唐詩逸』の成立について「家父（<sup>寛</sup>）見る毎に輒ち抄録し、数年を経るに及んでその獲るところ殆んど篋筒に溢る。是に於いて遂に輯集して三卷と成し、命じて全唐詩逸と曰ふ」とする。出版については「さきに途伊勢の四日市を歴しとき家父門人池五山（<sup>菊池</sup>）在り。是事を聞くに及びて乃ち僕に刻して傳へんことを勸む。僕その言を是とし京に來りて已に工に

命じたり。計るに春二三月に及ぶころ工當に竣るべし。竣らば則ち將にその刻木を齎らして以て西せんとす。」といい、「僕今より將に西長崎に遊び一たび外国清及び朝鮮紅毛諸船の風采を觀て以て賢識を弘くせん」としながら、『全唐詩逸』渡清実行の意志をしめした、という。

淇園は「孔陽その父の志を就さんと欲して能く以て刻鏤し、且つ遠く之を長崎に齎して以て之を西客に傳へんと欲するもの、豈また之を孝よく勞を厭はずと謂はざるべけんや。」と讃える。前稿までみてきた出版準備過程を、別の側面から確かめることができる。

京見物では、長樂寺・祇園社・錦天神・南禪寺・金地院・北野天神・舟岡山の梅など、旺盛な京巡りである。大晦日も「除夜三條橋邊二夜店ヲ見ル。祇園ヲケラ火」などと記す。元旦には三卿の御所参内を見物し、節分にも「日ノ御門ヨリ紫宸殿ヲ過ギ蛤御門ヨリ出ツ、御所ニ入り舞樂ヲ觀」るなどしている。一日かけて仲間と「祇園社ヨリ智恩院丸山端寮月峯高臺寺大佛古跡泉涌寺東福寺ニ到リ日暮レテ帰ル」(正月廿六日) ようなこともあった。雨天は書簡をしたためたり、ときには「廿七。雨。薩摩屋敷伊智地伊平治ノ會集。諸雅家來」るなど、雅会にも参加している。

購入品では「頑翁書畫二掛幅及び百體千字文ヲ購フ」「十三經ヲ購フ。價五兩二分。雲麾將軍碑帖。壹兩壹分」など、

『全唐詩逸』をめぐる長崎の日清文化交流―文化元年の市河三亥を中心に―

書家らしく書画・法帖が多い。ほか墨を古梅園に託して江戸へ送るなど、文房具の入手も多い。

こうして『全唐詩逸』刷り上がり待ちながら二ヶ月余、「二月朔。全唐詩逸皆出來」にいたり、「四月十一日…江戸へ詩逸板木出ス」で京における三亥の役目はほぼ終わった。『全唐詩逸』の初刷りを囊中に、文化元<sup>一八</sup><sub>〇四</sub>年四月十六日、長崎めざして京を出立することになる。

父寛齋の禁を犯しての長崎行であり、このあと約三ヶ月間、音信不通で頬被りすることになる<sup>(一)</sup>。心配する寛齋は「亥児ノ書ヲ得ザルコト百數日、秋初崎陽ヨリ発セシモノ秋杪始メテ達ス」と前書する詩をのこす。百数日後の音信は、日記では長崎入り二ヶ月後、『全唐詩逸』渡清にめどがついた翌月の七月十九日に「家書ヲ出ス」がみえる。

### Ⅲ. 三亥の長崎入りと唐医文人との交流

#### ① 唐医「胡兆新」との出会い

文化元年四月十六日、京を発った三亥は「黄檗山を遊覽。夜の舟で淀川、大坂八間屋岸へ」で大坂へ入って船待ち、その間に森川曹吾(名世賢、字維吉、號竹窓)濱田希庵(名世賢、字子微、號杏堂)ら医師文人とも会いながら、三日後十九日の船便で赤間関へ向かった。日記は「十九日以下五月朔ニ至ルマテ別ニ紀アレバ贅セズ」として空白だが、詩に「雲黑雲奔帆似劈、鯨吞鼉打坐如傾…」と詠うような暴風にも遭ったらしい。あとは順調に赤間関

から小倉へ入り、陸路で「未刻長崎ニ到」ったのが五月二日。しかし到着早々病に臥し、約二〇日間を無為と寂寥感で過ごすことになる。

前稿でみたとおり三亥の長崎行は、父寛齋の禁ずるところであった。理由は三亥の生来の病弱で、このたびようやく許したのも京のみ。せめてもとの願いに「大阪播州備前等播磨」までは認めたもので、長崎行きを口外すれば即座に京行きまで禁じたであろう。長崎到着早々の病臥は、ひとまず寛齋の憂慮が正しかったことしめす。

日記は「(5月) 六日 満拘攣堪エズ。午後大柴胡ヲ服シ。／七日 醫生來ル。四貼。／八日同。服藥三貼。／十日 終日唯藥ヲ服スルノミ。寂寥ニ堪エズ」などと記す。感冒がなおっても「(同) 十八日は日晴。余腫物殊ニ痛ミ忍ビズ」などがつづくが、その間に「「（研修医のことか）」と知り合うことができた。

体調が回復すると、「(同) 廿二日晴。品川作十郎ト牟田口大倫ト酒肴ヲ投ジ來リテ余が書ヲ学バント乞フ。初メ、「（書法ヲ説ク。皆屈服セリ）」」など、書家としての記事がふえる。文人交際の幅もひろがった。

三亥は、長崎文人との交流のなかで「初メテ書法ヲ説ク」を意識し、みずからの書論に「皆屈服セリ」など、書家としての自信をふかめたらしい。独立した書家「市河米庵」とし

ての出発は、長崎西遊の旅にはじまったとみることもできよう。

品川作十郎は、父や一族ともに三亥をあつく遇した人（後述）。その家で「(同) 廿七日。品川作十郎ノ叔母病甚シ。唐医胡兆新、二乞ヒテ病ヲ看セシム。余モ亦行キテ觀ル。坐中來ルモノ数人。訳人穎川仁十郎、初メテ面ヲ知ル」とある。品川一家との交際がきっかけで、唐医「胡兆新」や唐通詞「穎川仁十郎」と知り合うようになった。

この穎川仁十郎がまもなく、『全唐詩逸』渡清の重要な仲介者になる（後述）。また三亥は胡兆新の診療もうけたらしく、市河家にのこる処方箋「米庵先生氣多鬱結、調達肝脾主治」なるものが「寛齋先生」にみえる。

長崎では、唐医の往診には（おそらく蘭医も）「坐中來ルモノ数人」のように、見学者が集まるのが常だったらしい。おのずから医療交流や文人交歓の輪がひろがることになる。三亥も積極的に「余モ亦行キテ觀」るなど、さらに交際をふかめている。

## 〈2〉長崎における「胡兆新」

胡兆新、名は振、字は兆新、号は星池、姑蘇の人。病弱のため科挙を捨て、儒でなく医を学んだという（科挙及第でないせいが大漢和辞典などにもみえない）。幕府医官の多紀桂山の要請で、最新医学の問答指導をうけるべく長崎奉行が招いた唐医だという。

問答に赴いた医官たちの長崎入りは、三亥の立直後。そのときの医官との問答録が、宮内庁書陵部『清医胡兆新問答録』写本一冊（二〇五函）・『清国医事問答』写本一冊（二七六函）（一五七号）（二六五号）にのこる。

医学史研究では、郭秀梅・真柳誠『清医胡兆新問答録——一八〇四年の中国医への問答報告書について——』（『日本医学雑誌』（第47巻第1号））がくわしい。「清医の胡兆新に対する質問と胡兆新の返答が、それぞれ漢文と和文で子年五月に神代太郎・穎川仁十郎の連名で報告されている」（（子年は一八〇）（四文化元年子））という。穎川仁十郎は、胡兆新と幕府医官の医学問答でも通詞役をはたしたことになる。

胡兆新は、幕府招聘の唐医という公的な姿だけでなく、さきの品川宅往診もふくめ、医家文人として私的にもさかんに活動したらしい。長崎では「胡兆新。享和三年来る。儒医兼通。文墨の士と交わる」とされる。

### 〈3〉三亥と胡兆新との交際

書家米庵の「書」の研鑽にとつて、胡兆新との出会いは重要であった。米庵七十七歳の寿碑「米庵河翁壽之藏碑」には、「其れ長崎に遊ぶや、清客胡兆新に接し、書法を論じて、頗る得る所有り」とみえる。のち米庵の語りを聴いていた弟子たちも、つぎのように記す。

まず樋口銅牛。「長崎にて此時分胡兆新といふ醫在館なり。

此はもと醫學校よりの命に應じて来れる人にて、書、醫ともに宜しかりけり。館内にて種々筆語贈答し、書法、執筆の事も尋ねられ、執筆等も多く疑を解かれけり。今筆談一卷を藏す。先生の書を大に賞美し、或は跋し、或は顔聯など書き贈れり」。唐館に胡兆新を訪れた三亥は、種々筆語贈答しあいながら書法・執筆法などを質問し、多くの疑問を解消することができたらしい。野口勝一も「米菴、米元章又は胡兆新の筆意を以て字を作るより諸侯以下其門に入るもの最も多く一世殆ど米菴勁豪の風」になった、と記す。

一世を風靡した米庵筆法の原点の一つが、長崎における胡兆新の直接指導にあるとの見方が、明治期までつづいていたのである。いづれにせよ胡兆新との出会いは、長崎における米庵書学の進歩にとつてきわめて重要な意味をもつことになった。

胡兆新に「書」を学んだのは、三亥だけではない。『江戸諸

家人名録』（（文化二年版））に「書家／星池（名其馨 字其馨 西国柳橋 秦源 又号知齋 江戸人）」

蔵」とみえる「秦星池」は、『五山堂詩話』（卷八）が「星池秦其馨、書法適逸、名声日に興る。旧と嘗て崎陽に遊び、呉人胡兆新に私淑し、遂に能く其の訣を伝ふ。独り喜んで羊毫の筆を使ふ」とする。森鷗外『伊沢蘭軒』（（その五十三（長崎に於ける蘭軒の交友、父留辭致））も「清人にして蘭軒と遊んだものには、蘭軒文集に見えてある張秋琴がある。次に程赤城があり、胡兆新がある」と

記す（張秋琴については後述）。

長崎での胡兆新は、書にも巧みな「儒医兼通」の文人として迎えられた。長崎文人や幕府医官はもちろん、のち有名になる米庵・星池・蘭軒ら遊歴の文人・医師が、それぞれの道で私淑した。折から長崎入りした大田南畝も、多くの詩文に記録をのこす。胡兆新の招聘と来日は、医学のみならず書道もふくめ、ひろく日本文人界における重要な文化事件だったのである。

長崎には、これら著名文人だけでなく、在村文人もふくめいわゆる無名の人びとの、記録にのこらぬ小文化事件も少なくなかったであろう。

#### Ⅳ・唐通詞「穎川仁十郎」と『全唐詩逸』の渡清

##### へ1）唐通詞「穎川仁十郎」との交際

三亥の長崎入り最大の目的は、『全唐詩逸』を「清客に貧縁して速に彼方に伝」えることであつた。頼りは唐通詞であつた。

さきの五月二七日品川宅での出会いのあと、三亥が穎川仁十郎を訪ねたのは体調を回復した六月、「十七日。午前書ヲ學ブ。未牌穎川仁十郎ヲ訪」うている。この日は相手が「暑ニ侵サレ病臥ニテ遇ハズ」だったが、やがて「穎川仁十郎ヲ訪フ」たり「詩一首ヲ贈」ったり、文人としての交際をふかめた。

長崎は唯一外国との窓口として幕府直轄の支配はきびしい。出国の厳禁はもちろんだが、かりに一冊の書、一つの商品であつても、監視は厳重であつた。唐館にかかわる幕府禁令では、唐館へ出入する者の所持品はすべて「一構之内江入候諸色并外江持出品々、門番所二而相改之、可申事」など「門番」での検閲の対象であつた。表向き公的に奉行所が認可したものでないかぎり、たとえ一冊の書籍であつても、私的にひそかに海商へ手渡すほかならう。輸入の書籍については、周知の通り、キリシタンがらみの厳重な検閲がある。託す相手は海の商人たちである。『全唐詩逸』をだれに託したら、もつとも確實かつ有効に清国文人界へつたえることができるか。これも私的に信頼できる唐通詞に頼るほかならう。信頼関係は、詩文の応酬など文人的価値観にもとづく交際にかかる。さきの穎川仁十郎への「詩一首ヲ贈」などもその一つであろう、まもなく三亥は長崎文人からも唐通詞文人からも、新進の書家として信頼されるようになった。多くの人びとに招かれ、それを目当てに集まるもの少なからず、集まつた人びとにもまた招かれるなど、文人交際は雪だるま式にひろがった。

体調回復後の六月一ヶ月だけでも、「詩一首ヲ贈ル」（6ノ2）以下、「今村父子ハ阿蘭譯人：談話スルコト久シ」、「談論盡キズ三更ニシテ帰ル」、「文吉來リ余が書ヲ乞フ」、「來り

テ書ヲ観ルモノ数人、「書生数人來リ談話盡キズ」、「談話二更ニ到ル」、「談論二更ヲ過グ」、「午時：訪ヒ談論盡キズ遂ニ宿ス」、「席上揮筆」、「簡ヲ投ジテ余ヲ招キ藏書畫ヲ見セシム」  
「談話数刻。午前客居ニ帰ル」(6/24)などがつづく。

米庵の方からの訪問も精力的だった。同じ六月(18日)午  
前吉川生を訪フ。午後大槻民治ヲ尋ヌ。又清河源十郎ヲ訪ヒ  
遇ハズ。今村猶四郎ヲ訪ヒ又遇ハズ。良助ヲ訪ヒテ談話ス。  
夜ニ入り石崎融思ヲ訪ヒ談論二更ヲ過グ」のように、朝から  
晩まで訪問し談論つづきの日もあった。

こうして通詞文人や長崎文人のあいだで三亥の評価が高ま  
るなか、『全唐詩逸』渡清の機会がめぐってきた。

## 〈2〉『全唐詩逸』、穎川仁十郎から海商「張秋琴」へ

ついに三亥は日記に、「(6月)廿三日。朝穎川仁十郎ヲ訪  
ヒ詩逸一事ヲ談ズ」と記した。『全唐詩逸』渡清の下相談か、  
手渡したか。その日はつづけて「柳隆山ヲ訪フ、午後今村二  
到リ三島良吉ニ遇フ。席上揮筆。日暮榭林ヲ訪ヒテ家ニ帰ル」  
など多彩な文人交際の一日であった。

仁十郎への訪問の回数は多くないが、このあとも(7月)  
廿四日。薄晩穎川仁十郎ニ至ル、偶末次ニ遇ヒ談話二更帰  
路：」がみえる。そこで出会った末次氏からも「末次書ヲ投  
じてきた。乙名ら長崎町役との交際による信頼もふかまった  
であろう。目的とする『全唐詩逸』渡清の条件が、さらにと

とのつたことになる。

通詞との交際では、唐船や唐館あるいは蘭館の見学も多く  
なる。同じく六月、さきの蘭通詞「今村文吉」と同道で「大  
徳寺ニ上リ唐船ヲ望ミ又門前ニ到ル。是日唐船三艘入津シ唐  
館甚ダ喧シ」など、風向きで唐船入港さかなようすを見聞  
している。さらに「文吉云フ午後阿蘭人出島ノ館ヲ出デ□□  
ヲ観ルト。遂ニ共ニ行ク」など、出島の中にも入っている。  
中村作五郎(未詳。中村・今村との  
出合いは頻繁である)にも書簡でさそわれ、「聖福寺  
書畫ヲ曝スト。遂ニ行イテ見ル」など、長崎ならではの文物  
見学もみえる。聖福寺は、黄檗宗の名刹で、胡兆新が二の日  
に出張診療する場所。後日(7月)廿二日。梅眞ト聖福寺ニ  
至リ胡兆新ニ訪ヒテ筆談」することにもなる。

記事は簡潔で『全唐詩逸』の記載もさきの六月廿三日条に  
みえるだけだが、いずれにせよ『全唐詩逸』はすでに三亥か  
ら穎川仁十郎に手渡された。仁十郎は、折から季節風へのつ  
て何隻もが入港する喧噪のさなか、唐船か唐館でひそかに、  
見込んだ海商に『全唐詩逸』を託したのであろう。託された  
海商「張秋琴」から仁十郎(唐名「劉」  
公績)に宛てた書簡がのこる  
(原漢文)<sup>⑩</sup>。

曩に唐人逸詩一帙ヲ恵マル。捧誦ノ下殊ニ欣悦ヲ深クス。  
切ニ惟フ、唐人ノ詩篇ハ千萬牘ヲ累ヌ。之ヲ千載ニ傳ヘテ

遺逸少カラザラン。今一旦ニシテ之ヲ海外ニ得、棹ヲ回ラ  
スノ時、之ヲ詩人學士ニ傳ヘハ吟咏ノ餘貴國ノオヲ愛スル  
眞二人ヲシテ仰企窮ナカラシムルヲ徵スルニ足ラン。專函  
鳴謝シ並ニ福祉ヲ候ス。

公績老生臺電。晚張秋琴、拜手。(穎川唐名は「劉公績」)

さきに『全唐詩逸』を恵まれたが拝読してみても「殊ニ欣悦  
ヲ深、くしたといひ、帰国してこれを「詩人學士」に伝えれ  
ば、かならずや「吟咏ノ餘貴國ノオヲ愛スル、眞二人ヲシテ  
仰企窮ナカラシムル」であろう、という。一海商が異国の長  
崎で、期せずして『全唐詩逸』を恵与され、一見ただちにそ  
の文化的価値を直感した。自国の詩人・學士たちが日本の学  
才を仰ぎ見るような価値ある書籍を、自分の船で渡清させる  
…、その文化的使命感を素直な感動で表現している。張秋琴  
は「海商文人」ともいうべき存在であった。

海商文人は、科擧による士大夫層からみれば、一種庶民文  
人というべきであろう。日本の在村文人らがその価値を見抜  
いて版費を提供し出版せしめた『全唐詩逸』は、同じように  
庶民層たる海商文人が価値を認め、渡清が実現した。たがい  
に見知らぬままの間接ながら、ただひとつ文人的価値観だけ  
によるかわりでもすびついていた。目にみえぬアジア文化  
循環網が、両庶民層にまで作用していたのである。その一端

をひとまずここに読みとっておきたい。

三亥と張秋琴が直接に出会った記録はみえない。三亥の言  
及もない。すべて穎川仁十郎が、ひそかに事を運んだのであ  
ろう。三亥から穎川仁十郎へ渡された『全唐詩逸』は、おそ  
らくきびしい唐館禁令をかいくぐるようにして、私的に張秋  
琴へ手渡され、まもなくの出帆によって渡清したのである。

### 〈3〉海商文人「張秋琴」

海商としての張秋琴の文人振りは、文化元年八月出立の三  
亥と入れ替わりのように銅座御用で九月に長崎入りした「大  
田南畝」の諸記録、さらに十年後の文化十年、長崎奉行「牧  
野成傑」の「幕賓」として長崎入りした「市河寛齋」の詩・  
文・書簡などにかがえる。

大田南畝の長崎勤務は、文化二年九月十日〜二年十月十日。  
何回も出会って多くの記録をのこした。二人の応酬詩は  
『萍寄唱和』にまとめられ、南畝詩集の『杏園詩集序』、「海  
岳相豆紀行雜詠序」も張秋琴から得ている。きわめて親し  
い文人交際をつづけたらしい。

『萍寄唱和』冒頭には、「張教修 初名省堂 字秋琴、号  
萍寄主人 又号葬花庵」(「萍」は浮草。いかにも海商文人らしい)と記される。南畝  
が記録する文化元年入船七艘に、「船名皆吉 子九番 船頭 張  
秋琴、同財副 江泰交 同蔣岳初 同安針役 王偉燦 同惣代 林建瑤」  
がみえる<sup>①</sup>。

十年後に長崎入りした寛齋も、張秋琴との交際記録を詩文集『瓊浦夢餘録』にのこした。張秋琴のほかに江芸閣・鄒靜岩・譚竹庵・沈綺泉・劉景筠・劉夢澤らの海商文人がみえる。年間入船数を考えれば、船主（船頭）の多くが、しかるべき文人であつたとみてよからう。

「張秋琴」について寛齋は自宅宛て書簡で「秋琴は去ル年全唐詩逸百絶筆にて翁を存居申候ゆへ彌咄も出來申候」と記す。『全唐詩逸』を介して旧知の間柄のように意気投合し、筆談咄が盛りあがつたらしい。

江芸閣とくらべると張秋琴は「誠に船主にて売買方に心配いたし候故、芸閣程にもなく候」といいながらも、「兩人共に溫柔の質にて筆談往來面白き事共也」として、穏やかな文人氣質の二人との面白き筆談を楽しんでいる。その文才も「芸閣は詩書共に宜候。此末滞留中唱和も可致出約置申候。張秋琴も詩は上手にて候。是又唱和いたし申候」などと記す。七夕の宴でも、張秋琴の詩「七夕同韻」がのこる。

張秋琴の文人振りは、森鷗外『伊沢蘭軒』がしめす張秋琴宛の蘭軒書簡にも読みとれる。清朝考証学からめ、考証学家について問う部分を引用しよう。（読み下し）  
（は問外）

…夫れ説書の業は、漢儒は訓詁に専らに、宋儒は論説に長ず。而して晋唐は漢の末流、元明は宋の余波なり。貴朝に

至れば、則ち一大信古考摭の学、涌然として振起し、一古書を注するに、必ず異を数本に讎し、群籍に考証す。…謹んで問ふ、貴邦当時の医家者流に、信古考証の学に於て、其の人其の書、何等の者有りやと。

漢儒は訓詁…、宋儒は論説…、晋唐は漢の末流…、元明は宋の余波…と学史をまとめながら清朝考証学の意義を認め、考証学にすぐれた医家の名や著作を問うている。張秋琴は、こうした質疑に答えられるだけの文人として遇されていたことにならう。

これら海商文人のいだいた寛齋像は、張秋琴・江芸閣連名の「寛齋宛筆談」によみとれる。ひろく日本文人観をしめすものでもあらう。

「晋菴儒林。清風兩袖。蘭玉成行。更可欣者。梯雲直上。必爲廟堂美器…」解説はむずかしいが、「晋で儒林へ菴み、清風兩袖、蘭玉に（君子の）成り行く。更に欣ぶ可きは、梯雲直上、必ずや廟堂の美器と爲らん」と読めようか。つづけて「ただ素より文行に嘉言あり。布りて崎陽に満つ。これ府幕之席を以つて固より宜しき所のみ」としながら、「…秋等唐山よりと雖も、然してまた未だ嘗て學問せず。儀表（手本の）に瞻るを得る、欣感に勝ず。並べて寛齋先生の指教を請けん」と結ぶ。

寛齋の学才と文才詩才を賞賛しながら、その文化的影響が長崎中にゆきわたり「幕賓」として宜しきを得た…、自分たちは唐からきたが正式な学問は修めていない…、ぜひ寛齋先生を手本にして教えをうけたい…、という。こうした寛齋像は、さきみた十年前『全唐詩逸』を託されたときの張秋琴書簡にも通ずるものであろう。

「府幕之席」への言及がみえるが、海商にとつて寛齋が「幕賓」であることの意味は大きかった。「筆談往來面白き事」といえたのも、幕賓つまり特権文人として遇せられたことが基礎にあつたはずである（前掲<sup>(2)</sup>末尾参照）。

しかしそれだけではなからう。海商文人からみた寛齋は、平生交際する通詞文人や一般の長崎文人をはるかにこえる存在であつた。自国の「詩人学士」らが「仰企窮ナカラシムル」ような「貴国ノ才」であり、海商文人みな「寛齋老先生の指教を請けん」というほどの超一級の日本文人であつた。それゆえに海商文人らに厚く遇されたのであろう。

ついに寛齋は、かれらから「此度帰帆には同道致申度」との申し出までうけた。みずからも「誠に近頃は唐人の様に、相成候心持…」と記すようになる。これも、『全唐詩逸』渡清以来の寛齋に対する高い評価のあらわれといえよう。

これら寛齋と海商文人の交流の詳細は別稿とし、ここでは、『全唐詩逸』渡清を實行した海商文人「張秋琴」のレベルの

高さをみるにとどめる。

#### V. 市河三亥と長崎文人の交流

##### ① その後の三亥、長崎文人との交流

その後の三亥の動きをみよう。七月にはいると、終日「揮筆ニテ出デズ」（7/23）はじめ、「<sup>(聖無動寺)</sup>額字三通出来」、「…書論ヲ講ゼンコトヲ乞フ、遂ニ諾シテ他日ヲトス」など、書家としての活動が多くなる。

大寺にまねかれれば、「（8月）六日。巳牌大徳寺ニ至ル、主僧余ヲ招キテ揮筆ヲ乞フナリ、屏風十二曲及び小障数曲ヲ書シテ後天満宮ノ額ヲ書ス」など、障屏や額の揮毫を求められる。さらに「坐中來ル者聖無動寺、林田六郎兵衛、是モ亦書ヲ乞フ、初更帰ル」など、そこに集まつた人びとからも乞われて揮毫大会のようにもなる。「（8月）七日。…聖無上人來リ余ヲ引キテ林田ニ至リ書畫ヲ見セシム」など書画の鑑賞あるいは鑑定も乞われる。そこでまたさらに書の講義を求められ、「書論ヲ講ゼンコトヲ請フ。是夜勸講」などにひろがる。書家文人としての評判は、いっそう高まつたらしい。

通詞文人との交際も、唐通詞では穎川仁十郎のほか「彭城仁兵衛」、蘭通詞ではさきの今村金兵衛・文吉父子のほか「吉尾六四郎」とも会っている。今村金兵衛の自宅に招かれ、座中の「島原侯儒臣伊藤良助」とも「談論盡キズ、三更ニシテ帰ル」など、通詞文人を介しての交際もひろがっている。

長崎警護にきている諸藩士とのつきあひも「久留米間役坪池八左衛門ニ從ヒテ蘭船ヲ巡覽ス、用達井上悦右衛門大世話ナリ」などがづく。

長崎では通詞文人が、海商文人はもちろん警備所に勤番する諸藩の武家文人や長崎入りの遊歴文人など、ひろく文人交際のとりもち役・かなめ役をはたしていたらしい。長崎会所のメンバーも同じだったであろう。三亥と会所の腹巻要八との出会いは頻繁で、唐人の墓参行事の見学では、「(8月)十日。腹巻ト悟眞寺ニ到ル、是日唐客墓ヲ拜ス。凡ソ來ルモノ六十一人、中ニツキテ名アルモノハ劉培原、王竹齋ナリ」とみえる。海商文人の「名アルモノ」たちとも、何らかの交歓をもつたらしい。

胡兆新とはその後も、「(7月)廿七日。梅眞ニ從ヒ崇福寺ニ至リ胡兆新ニ遇ヒ談話ス」、「(8月)二日。胡兆新聖福寺ニ出ヅ。余亦對話ス」、「(同)七日。…午飯畢リ崇福寺ニ至リ胡兆新ト對話筆談良久シ」など、聖福寺での出診日にあわせたりもして回をかさねている。その筆談の紙片について「米庵伝」は「筆談は書論に関するもののみが存した」と記す。對話筆談のほとんどが書論であったとすれば、書家「米庵」三亥が胡兆新との筆談で得たものは大きかったであろう。

帰郷が近づくと「(8月)九日。…兆新額字亦末次ヨリ來ル」など、胡兆新の揮毫による扁額が、末次をとおして届い

ている。額は「龍飛風舞の四字」であったというが、「小山林堂」(米庵の書号名)の額が現存する<sup>(15)</sup>。

せまい長崎には、つねに地元文人・通詞文人・海商文人らがひしめきあっていた。これに招聘の清国文人や全国各地の遊歴文人がくわわる。そこにくりひろげられる濃密な文人交際と文物交流など、長崎の文化刺激の影響は大きかった。長崎を訪れた遊歴文人がのこす紀行・詩集・俳文の題には、「瓊浦」(長崎の美称)や「西遊」をふくむものが多い(『国書総目録』でおよそ「瓊浦」26種(地誌類を除き)、「西遊」26種)。このほかのものもふくめ、遊歴をひきつける魅力の一つが、これら長崎特有の文化刺激だったであろう。

三亥は帰郷出立の前日も、「(8月)十五日晴。穎川・腹巻・柳・彭城ヲ訪ヒ品川作太ニ至ル。吉川ヲ訪フ、吉川平戸へ発ス期朝日ニアリ、余モ亦將ニ発セントス。談話盡キズ。帰りニ中村・平尾ヲ訪ヒ品川ニ帰ル、諸君別ヲ告グルモノ多シ」など、別れ惜しむ交歓のシャワーをあびている。穎川訪問は『全唐詩逸』渡清の礼であろうか。

## 〈2〉三亥の江戸帰郷と長崎文人の餞別

三亥は、江戸帰郷にあたって多くの長崎文人から餞別の品をうけた。いかにも長崎らしいものが多いが、のちのちまで三亥が貴重視し、図録類にのこしたものをみよう。

まず明人「魏九官」子孫で唐通詞の鉅鹿氏（日本名「助五郎」）から贈られたのは中国産の名筆。ながらく愛用した三亥は、のち『善畫文房圖録』に筆図をのこしている。ほかにも胡兆新の筆など、記録にのこした文房具類は多い。

最も貴重だったのは、さきの品川氏からの贈物であろう。

三亥は、品川父子から一家あげての欲待をうけた、その別れの心情を「多謝交情切、黯然雙淚流：」などと詠うが、とくに「翁」の餞別「明神宗皇帝宸翰 金字妙沙經」の貴重さについて『小山林堂書畫圖録』・『米庵先生百古』などで繰り返し言及する。<sup>(16)</sup> まず『小山林堂書畫圖録』にこう記す（原漢文）。

：則ち帝の書における固より贅を待たず、余初め魯公多寶塔碑を學ぶ。この帖を獲るに及んで熟臨するに數百、過して楷法に於いて頗る得るあるを覺ゆ。嗚呼希世の寶、海外萬里轉じて余に歸し余が書學を編む襍成す。一たび之を臨する毎に、未だ嘗て翁の厚誼を感ぜずばあらず：」

長崎ゆえに流入した「希世の宝」が、ついに「海外萬里転じて」みずからのものとなり、臨すること數百回、楷書の書法に得るところ大きく、ついに自分の書學を編み上げることができた、というのである。

たしかに「金字妙沙經」の書体は、すでに『全唐詩逸』版下にもあらわれている米庵特有の端麗な楷書に酷似している。自身の楷書の書法によく似ながら、なおこれを超越する技の書をみた感激を、長い前書きの詩「題明神宗皇帝宸翰金字妙沙經」に詠っている。『米庵先生百古』から前書き冒頭部をみよう（原漢文）。

文化紀元甲子夏、余、崎陽に遊び、品川翁を主とす。翁、余を遇するに甚だ厚く、別に臨んで、贈るに此經を以てしていわく、是は祖先海に航し獲する所にして蔵すでに、二百年餘、今將に君に與えて別れんとす。再會は期し難し。因て以て餞と為すと。今を距つること殆ど五十年、実に余が家の第一の秘藏と為す。：

品川氏先祖が航海で入手した愛蔵二百年の品であること、三亥との再會期しがたき別れに臨んで餞としたこと、米庵秘蔵五十年の第一品になつてゐること、などを記す。

つづく詩ではこう詠う。長崎に入ってから「佛刹商家に舊物を搜す。奇品見ずして意惘惘たり：」など、佛刹や商家に旧物をさがしたが奇品なく内心あきれていた。ところが「川翁別れに臨み手ずから箱を開いて「此經を我に餞」してくれた：、目にした瞬間「驚喜して拝展し心惘惘：」、あまり

の驚喜に心おののくばかり……。その見事さを「泥金三百幾十  
字。楷法森嚴大寸餘。一室炫燿皆を裂くに似たり」と詠い  
あげた。

はじめて「金を貴びて佛典を寫すを知る」ことともなり、  
金字は「極て嚴莊。神物我に到りて靈有るを覺ゆ」と詠嘆を  
くりかえす。紙質と紺青の地についても「紙は麤青を用い滑  
して光る。蠹食は字を避け敢えて傷つけず」と感嘆する。

のち「米庵」三亥の門弟らは、この法帖について語る師の  
言をつたえた。「楷書の初め唐の顏魯公原拓多寶塔碑帖を專  
ら學」んでいたが「墨帖の眞蹟に遠きことを憾み」に思つて  
いた。しかし長崎で「品川何某に留滞し、紺地金泥に佛像  
を畫き楷書の字方寸ばかりの書」を熟覽、その「筆力雄勁、  
書法は顔に倣ひて、一點一畫意至り筆到り、凡力の及ぶべき  
に非ず」を知り、「此に於て墨帖と眞蹟との相違せるを悟」  
つた、という。そして常々「東歸の後苦心此眞蹟を學び得て  
楷書大に進み、筆力を得られたり」と語っていたという。

(前掲(8))

ふだんみなれた写しによる法帖とまったく異なる、「眞蹟」  
に学ぶ重大さを悟つたことなるう。「米庵」三亥の大成に  
はもちろん、ひろく幕末書道界にあたえた影響は大きからう。  
品川氏の饒別「明神宗金字妙沙經」の授受も、一つの小文化  
事件であった。

これらの文物は、書籍や白糸など公的な検閲ルートとは別  
の、いわば私的ルートで長崎へ流入する。それだけではない。  
ここでの「祖先の海外に獲」した書蹟のように、所蔵者がそ  
れぞれの価値を熟知し、価値を知りうるものだけに見せるに  
とどめて、長年にわたり保護してきた。

「希世の宝」が「海外萬里転じて」長崎に入り、「文人的  
価値観」にささえられて多くが秘藏されつつ滞留する。長崎  
は一種「文化ダム」をなしていた。それがさまざまなきつか  
けで長崎をはなれ、各地にひろがる。そこに何らか画期をな  
すような変化が生まれ、それぞれに小文化事件をなす。

列島でただ一つ外交を封じ込めた長崎、その表の政治世界  
にはあらわれない、私的ルートにかくれた日清交流や文化事  
件は多かつたであろう。三亥をめぐる『全唐詩逸』と  
「明神宗金字妙沙經」の動きは、その一端をしめしている。

へ3) おわりに―東アジアの文人的価値観―

『全唐詩逸』の渡清では、まず一般多数の長崎文人がその  
価値をよく理解し協力した。さらに新進の書家としての才を  
高く評価し、弟子入りや書論の教授もつづいた。「米庵」三  
亥を見込んで、舶載され長崎に滞留する貴重な書画・真筆・  
法帖・名筆が、惜しげもなく贈呈された。

通詞文人らも詩文の交歓や唐船・唐館あるいは蘭館の見学  
などで交際をふかめた。穎川仁十郎は、『全唐詩逸』を海商

に手渡すもつとも重要な役割をはたした。

海商文人も、士大夫層はことなる庶民層ながら、南畝や寛齋ら日本最高レベルの文人とも対等に交際しうる、高い文化レベルをもっていた。張秋琴は『全唐詩逸』をみてただちにその価値をみとめ、文化的使命感をもって渡清を実行した。的確にも日本研究の文人「翁廣平」へ、さらに「鮑溱欽」へ、清国文人界へ、もつとも確実なルートへつたえて力量を発揮した。

海商レベルをこえる高位の文人がくれば、唐医文人「胡兆新」のように、医・書ほか多方面にわたって多くの日本文人が学んだ。書での三亥もふくめ、それぞれ国内でなんらかの文化的画期をもたらすような小文化事件をなした<sup>18)</sup>。

いずれもこれらは、東アジアに普遍する「文人的価値観」をもつもの同士の、私的な文人交際や文物贈答の交流網によるものであった。発端となる『全唐詩逸』出版は、在村文人の版費拠出にはじまる。在村文人がその意義を見抜いて版費を拠出した『全唐詩逸』、その価値を通詞文人・海商文人らも同じように見抜いて協力した。海商文人と在村文人とのかわりは当然ながら直接ではないが、東アジア普遍の文人的価値観がそれぞれに作用していたことはまちがいない。

雅号による文人交際は、表の公的な政治世界とは異なった

次元、陰の裏の私的な別世界に、一種対等な世界をなす。公的な表世界では対面もならない身分差のものも、私的に座をなし風雅交歓を楽しむ。在村の村域はもちろん、藩域も国域もこえて交流する。これら風雅固有の交流空間を「風雅世界（雅号世界）」とよんできた。長崎における文人交流は、まさに公的な政治世界の「国境」をもこえる、私的で一種対等な風雅世界そのものであった。

長崎は、政治世界からみれば、矛盾に満ちた外交を封じ込める一種「制外の地」であった<sup>19)</sup>。その「制外中の制外」ともいべき唐館は、公的には長崎奉行のきびしい支配と監視のもとにおかれていたが、そこに行きかう風雅世界の文人交流には、政治世界の文化的溶解とでもいべき現象がみえる。さきの寛齋が海商文人らに、国境を越えて「此度帰帆には同道致申度」といわれ、みずからも「唐人の様に相成候心持」と記したのは、そのあらわれでもあろう。

日本の近世社会には、これら表の公的な政治世界と陰の私的な風雅世界、少なくとも二つが、矛盾をはらみながら相互に補完しあう関係構造がみえかくれている。

『全唐詩逸』渡清からほぼ半世紀、内外の状況で政治世界がくずれだすと、補完しあう風雅世界の文人的価値観に、あらたな価値へ向けての手さぐりが加わる。まもなく政治世界

が一挙に崩壊すると、それまでの文人的価値観のその上に、あらたな欧米の文明的価値観をつみあげる動きがあらわれよう。

近世の公的な政治世界と私的な風雅世界が補完しあう形は、一つの終焉を迎える。

付 本稿は、二〇〇四年度学習院女子大学日本文化学科の後期科目「日本文化交流史Ⅱ（東アジア）」の第六講をもとにした。（二〇〇四・十二・十五）

### 【補注】

(1) 以上、在村文人・在村文化については拙著2001『近世の地域と在村文化』吉川弘文館、文人的価値観とアジア循環網については拙稿2003『明清文化と日本社会』『日本の時代史15』高埜利彦編。校者（版費校者）については拙稿2004b『全唐詩逸』出版・渡清と日本在村文人』（学習院女子大学紀要）第六号。上州箕輪「漆園」下田衡については同2004c『全唐詩逸』と上州の在村文化』（群馬文化）二七八号。伊勢四日市の池桐孫とその在村詩社については、拙稿2005b『全唐詩逸』出版・渡清をめぐる在村文化と東アジア一四日市宿ほか東海道諸宿を中心に』（『民衆史研究』69号二〇〇五年五月掲載予定）参照。（以下「前稿」あるいは2003などと略記。）

(2) 「海商文人」あるいは「通詞文人」などの呼称は、「業雅一体」の在村文人を「蚕種商併人」などと呼んでいることもあわせ、前稿から使っている。ここでは(1)の前稿につづけ、在村文化ひろく近世文化とアジア文化循環網とのかかわりに視点をおき、『全唐詩逸』をめぐる在村文人→江戸文人→長崎文人→唐通詞文人→海商文人をつなぐ文人的価値観と交流の実態をさぐる。在村文化とのかかわりは間接にとどまるが、在村文人がその意義を見抜いて版費を拠出し

た『全唐詩逸』、その価値を通詞文人・海商文人らがどのように認識し、どのような価値観で評価して渡清に協力したか、などを以下でみることになる。

なお寛齋が鼠貞筋の牧野成傑の長崎奉行赴任の「幕賓」として文化十年に長崎入りしたときの文人交際や文物入手、それに幕政外交の皆ともいふべき長崎奉行がどのようなかかわったか、奉行を頻繁に交代歴任する旗本の私領支配とその領民（在村文人もふくむ）にあって長崎在任はどのような意味をもつか、などについては別稿を用意している。

(3) 三亥「西遊日記」（仮称）は市河家所蔵か。孫の市河三陽は別に遊歴中の詩集「西征稿」があったともいう。「国書総目録」では題名「西遊小草」で「漢学者著作目録」にある、とのみ記す。原本は関東大震災で焼失したともいう。ここでは市川三陽「市河米庵傳」（女「萬幾校」）、「東洋文化」第一七一―一八五号、一九三九―四〇年。以下「米庵伝」所収の「読み下し文」を引用する。

(4) 一部は拙稿2004b参照。

(5) 市河三陽「市河寛齋先生」（以下「寛齋先生」）所載。とくに伊勢四日市での顛末「池五山：是事を聞くに及びて乃ち僕に刻して傳へんことを勤む」など、前稿であきらかにした出版にいたる経過を別の言い方で伝えている。

(6) この間の事情については(1)前稿参照。

(7) 西琴石「長崎古今学芸書画博覧」。

(8) 樋口銅牛「市河三亥傳」書苑第九号。野口勝一は『絵画叢誌』第一九四巻、明治三十六年三月。

(9) 定「兼而安置役人之外、二之門より内江出入、停止之事、一唐人手廻り二相交、商売物有之候ハ、留置可申出事、一措之内江入候諸色并外江持出候品々、門番所二而相改之、可申事」（正徳元辛卯十月「徳川禁令考」）検閲の実情の記録もある。

(10) 張秋琴書簡、「寛齋先生」所掲。

(11) 南畝史料は『大田南畝全集』（岩波書店一九八五―二〇〇〇年）お

- よび「蜀山人未刊資料集」ゆまに書房一九八四年。「洋寄唱和」は「国会鸚軒三一五五」。
- (12) 寛齋先生餘稿（遊徳園一九一六年）。以下長崎の寛齋関係は同じ。  
（以上（9）～（12）別稿予定）
- (13) 烏雀應先集。機校合暫停。人間逢七夕。天上會雙星。  
整孫迎新月 穿針倚畫屏 多情小兒女 乞巧向空庭。（同前）
- (14) 森鷗外『伊沢蘭軒』『鷗外歴史文学集 六』（岩波書店二〇〇〇年）。
- (15) 『市河米庵遺墨特別陳列遺品と関係資料目録』（東京国立博物館一九五八年）に「胡兆新書扁額（小山林堂）一面」がみえる。
- (16) 『明神宗皇帝』は明第十三代皇帝（廟號神宗、在位四十八年、年號萬曆）所蔵。『同図版目録（中国）』に「87 楷書妙沙経冊 明神宗（萬曆帝）1帖 明時代 万曆29年（1601） 紺紙金泥書 34.8×225.8 市河三兼氏寄贈」とみえる。ここでは三亥の記述をとり「明神宗金字妙沙経」と記す。『小山林堂書画圖録』は「日本書論集成」第四卷。『米庵先生百古』は国会鸚軒文庫。
- (17) 文人的価値観および文化ダムについては拙稿2003・拙稿2004を参照。長崎外交については、広い意味での外交は対馬・鹿児島・松前にもあるが、南蛮キリシタン問題、紅毛オランダ対策、韃靼警戒や清国海禁もからみ正式国交ないまま入港する清船扱い（やがて漂流民送還問題も）など、幕初期特有の矛盾を内包するがゆえに長崎一港に封じ込めた。そこに新たに生じる長崎特有の問題をみるために、ひとまず区別する意味もふくめての「長崎外交」であるが、むしろ、鎖ざしながら最小限のみ交わるといふ矛盾を示す意味で「長崎鎖交」とでも言うべきか。
- (18) 近世初期の医・書の「戴曼公独立」、詩文・医の「陳元贊」などについては（1）の拙稿2003で言及した。
- (19) 「風雅世界（雅号世界）」については（1）の拙著2001。長崎の「制外の地」、「制外中の制外」については同拙稿2003参照。

（本学非常勤講師）